

作家・(財)C・W・ニコル・アフアンの森財団理事長

# C・W・ニコルさんに伺いました

聞き手

苗村 由美  
編集委員

[writer] 三阪 真希

土木は技術だけではなく、環境への影響、いかに自然を生かすかを総合的に考えることが大切なのではないか。

2009年6月18日(木)

(財)C・W・ニコル・アフアンの森財団 事務所

## アフアンの森には素晴らしい土木と最悪の土木がある

——ニコルさんからみた土木について、お聞かせいただけますか。

**ニコル**——私は東京でもカナダにいるときも、自然が豊かな地域に住んでいました。幼いときから自然はあつて当然のものでしたし、探検家になるか、動物と生物にかかわる仕事をしようと考えていましたから、自然を壊すようなひどい土木には猛反対です。けれど、私は素晴らしい土木があることも知っています。ですから私を敵だと思わないでください(笑)。

素晴らしい土木は、たとえばこの事務所の向かいに見える鳥居川です。大きな氾濫はんらんを起こし、改修工事をするようになりましたが、はじめの計画ではコンクリート三面張り。それには

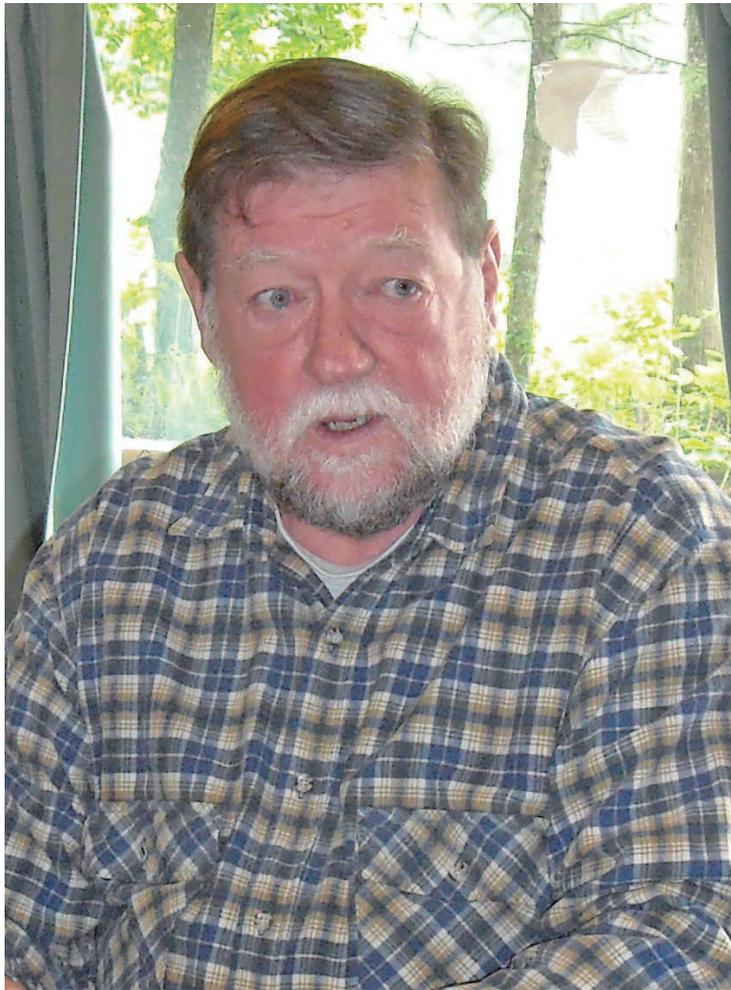
私も地元民も反対でした。そこで私が「近自然工法」の専門家で、屋久島の登山道などを手掛けた福留脩文さん(株)西日本科学技術研究所)に相談し、関係者と話し合つて計画を変え、自然を生かした石づくりでの改修にしたのです。おかげで川には魚や生物もすめるようになっていきます。

また、「アフアンの森」の敷地内にある水路でも、素晴らしい土木と最悪の土木を同時に見ることができません。江戸末期のものと思うのですが、粘土でつくられた水路で、川のように流れがあるので水に酸素が入り、逃げ場所もあるからイワナもすんでいた。それが昭和になつてつくられた水路はコンクリート三面張りの、いわば滑り台です。生物が落ちたら逃げられずに流されるしかないので、魚もいなくなつてしまいました。「水路は、田んぼに水を引くためであればどんなものでもいい」というのはおろかなことです。そこに生息しているものや自然のことをもつと考えるべきなんです。

## 使わないときは公園に。温度も下がる「緑の駐車場」

——生まれたときから自然とつきあつてきたニコルさんから見て、今の都会に言いたいことはありますか。

**ニコル**——いつも思うのは、都会は人間のためよりクルマのための面積の方が広い。だから、たとえば広い駐車場を緑の駐車場にしてみてもうでしょう。ドアの開閉の邪魔にならない所に木を植えるんです。芝生じゃなくても雨が通るブロックを使つたり工夫もできます。英国やドイツにいい例がいくつもあります。木は樹間に日陰をつくるだけじゃなく、葉っぱから蒸散して温度を十何度も下げてくれるんです。緑の駐車場、いいと思いませんか? 駐車場はもともと安全に車を置くところなんです。なぜコンクリートやアスファルトでなければならぬのでしょうか? 緑の駐車場ならば、大きな会社の駐車場などは、使わない週末には公園にしたつていいじゃ



### C.W.ニコル (C.W.Nicol) さん プロフィール

1940年英国南ウェールズ生まれ。17歳でカナダへ渡り、カナダ水産調査局北極生物研究所の技官として海洋哺乳類の調査研究にあたる。1980年長野県黒姫に居を定め、1995年日本国籍を取得。2002年「(財)C.W.ニコル・アフンの森財団」を設立し、理事長を務めている。2005年名誉大英勲章を賜る。空手7段。

ないですか(笑)。

——日本は世界に比べると環境に優しいものをつくるという面で遅れているのでしょうか。

**ニコル**——日本は進んでいる面と遅れている面の両方があると思います。たとえば日本は地震が多い。地震に強い技術は世界一じゃないでしょうか。お城の石垣は何百年も残っている。ただ、いろいろな優れた技術があるのに、総合的に考え、環境を後回しにしてしまう。昭和の、特にバブルの時期は環境を考えていない建設が多かった。私は以前、とある町長に「人間と自然とどっちが大切なんですか？」と聞かれたのですが、どちらか一方を選ぶものじゃないでしょう。

また、私が最後に政府の仕事をしたのはカナダの環境庁でしたが、予算は当時の日本の環境

庁の400倍でした。カナダでは環境に影響を及ぼす土木には最後に環境庁の判が必要。チェックは厳しいですが当然のことです。そういう意味で日本との違いはあると思いますね。

### 土木は理想を求めていなくてはならないもの

——ニコルさんから土木技術者へメッセージをお願いします。

**ニコル**——自然の回復のために働いてもらいたいですね。日本にはサケやイワナが上がっていた

何百もの川があったのですが、ほとんど建設でダメになっている。それをつくり直せるのなら、できることからやろうよ、といいたい。英国のテムズ川は私が子どもの頃、魚もいない死んだ川でした。しかし今ではサケがもどり、ロンドン郊外では透明度が5mにもなりました。それは土木の専門家、技術者、生物学の専門家が協力した成果です。

また、長野新幹線はトンネルが多いですが、便利になっただけでなく、物を運ぶエネルギーも減らせる、これはいいことです。ただし、トンネルをつくるときに出土土砂をどうするか、そばにある谷を埋めるのであれば、そこにいる生き物はどうなるのか、そういう意味でも総合的に考える必要があります。

ほかには、森をどうにかしないといけない。山を管理するために、安全に働ける機械を通す林道は必要です。けれども、単にアスファルトで広い道路をつくるのではなく、砂利などを敷いて、道の両端に木々を植えて葉が重なり緑のトンネルになるようなものもいい。そうすれば、動物の通り道にもなり、林道が利用されなくなったら跡地に木を育てることもできるのです。

緑の駐車場もそうですが、そういった工夫をすること、さまざまな視点から総合的に土木を考えるように考えることが重要ではないでしょうか。土木は理想を求めていかななくてはならないものだと思います。

——本日は貴重なお話しをありがとうございました。